

捕・投運動の組合せに関するモルフォロジー的研究
—小学校高学年期の児童を中心に—

佐々木 歩 (学校教育課程・教科教育実践選修)

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

子どものころから現在に至るまで、様々な運動を続けてきたが、いつからボールを捕って投げる運動ができるようになったのだろうか。高校3年間と大学4年間の計7年間ハンドボールに関わり、いつのまにかスムーズに行うことができるようになっていた。そして、この7年間で、小学校高学年と高校のハンドボール未熟練者の捕る運動、投げる運動、捕って投げる運動が類似しているのではないかと感じた。「捕って投げる」運動を詳しく見るためにマイネルの「スポーツ運動学」を参照し、モルフォロジー的考察法をもとに、小学校5年生のハンドボールの授業のビデオを分析する。そして、どのようにできていないのかを「諸カテゴリー」を用いて運動モルフォロジー的視点から考察し、浮き彫りにしていくことにする。

<本論>

第一章 捕・投運動の特性論

捕・投運動を見ていくには、運動記述が必要である。この記述は運動を外面的に、写真さながらに正確に写し取るというだけではなく、同時に運動経過のある特徴を浮き彫りにし、説明するものである。しかし、運動をどんなに正確に、完璧に記述しようとしても、やはり不完全さはまぬがれないものである。運動記述は運動経過の全体をできるだけ正確に把握することであるが、運動経過を目で見て感じたことを記述し、特徴を浮き彫りにすることは主観的なものであり、本質的なものとはいえない。主観的なものを客観的、本質的なものにするために、諸カテゴリーを用いなければならない。諸カテゴリーとは①運動の局面構造、②運動のリズム、③運動の伝導、④運動の流動、⑤運動の弾性、⑥運動の先取り、⑦運動の正確さ、⑧運動の調和の8つである。捕・投運動では、組合せが見られる。組合せとは、ふたつあるいはそれ以上の異なる運動の連続である。捕・投運動の組合せは運動の局面融合、運動の先取り、運動の正確さと強く関係している。運動によって際立つカテゴリーは異なるが、すべてのカテゴリーが相互作用して出来栄の良い運動が成り立っているのである。

第二章 各年齢段階における捕・投運動の発達

人間はいろいろな運動をして生活をしている。そして様々な運動を経験する。捕・投運動は物を「把握」しつかむことから始まる。物を「把握」し移動させることからやが

て「投げる」のである。ゼロ歳においては、おとなになってはとも見られないほど急速な発達をするものである。1歳から5歳に至る時期における子どもの運動の発達はさらに急速で多様な形態を示す。小学校低学年は、就学前の6歳から8歳までの時期で、少年少女時代の最適学習期とは、9～11歳、12歳の小学校中・高学年期のことである。少年少女時代の最適学習期の運動は意識的に制御され、安定し、どんどんうまくできるようになり、無駄がなくなってくる。捕・投運動の組合せは、運動経過を2、3回示すだけで、運動の粗形態をうまくやりこなすことができる。これが、この時期の特徴として挙げられる「即座の習得」である。

第三章 捕・投運動に関する印象分析

印象分析とは、運動経過を現実に行われていること、目だけで運動を観察した主観的な印象を、諸カテゴリーを用いて本質的なものとして諸徴表を浮き彫りにし、把握していくことである。「捕る」と「投げる」の組合せをみると、2つの基本形態を組合せる能力は7歳くらいにやっと思えるようになる。組合せがスムーズに行える前提となるのは、次にくる運動の目的を先取りすることである。9～12歳の時期になると運動発達は完了に入り、運動と運動の組合せはよりいっそうスムーズに行うことができるようになる。

ここでは、「左右2方向からパスを受け、ボールを捕ってからすぐに目標に向かって投げる」という運動課題を提示し、秋田大学教育文化学部附属小学校5年A組の児童の捕・投運動を観察した。その結果、左右それぞれ5つに類型化することができた。分類は脚の運び方を視点として行ったものである。その分類したグループから典型例を抽出することができた。

<結論>

小学校低学年において、子どもはどんどん意識的に運動するようになる。この年齢は「放る」ことから発達し、目標投げなどを行うことができる。捕運動は、先取りがまだうまくできていない。手だけでボールを捕ろうとしているため、より正確な運動の先取りをしやすくすることが必要である。この時期の子どもには、基本形態の運動の組合せが出現する。スムーズに運動が組合せられるためには次にくる運動を先取りすることが重要である。少年少女時代の最適学習期においては、運動発達の経過が完了に入り、バランスがとれ調和がとれたものへと近づいていく。捕・投運動の組合せには、局面構造、先取りなどの諸カテゴリーが重要である。先取りができなければスムーズな運動を期待することはできない。運動の質を見ていくための諸カテゴリーは、どのような運動経過にもあてはまるものであり、諸カテゴリーを用いることで運動の出来栄をみていくことができるのである。本研究をもとにして、教育現場の運動指導に役立てたい。

(引用、参考文献省略)